

F. Scott Fitzgerald の短編にみられる 色彩表現について (Ⅲ)

小林 資 忠

(英米文学研究室)

[1]

本論では、前稿¹⁾に引き続いて Malcolm Cowley が1951年に編集した短編集 *The Stories of F. Scott Fitzgerald* から、Fitzgerald が1924年に発表した 'Absolution' と 'The Sensible Thing' 及び1925年に発表した 'The Baby Party' と1926年に発表した 'The Rich Boy' を取り上げ、色彩表現に注目してそれらの作品の内容を検討してみよう。テキストは Cowley 版を用い、引用の最後の () の中にページ数を示す。

'Absolution'²⁾ では11歳の美少年 Rudolph Miller³⁾ が主人公として登場する。彼は幼い時から自分の言動について、いつも反省し良心に問い掛けるようにという宗教生活を習慣付けられていた。⁴⁾ 3日前の土曜日に父 Carl Miller⁵⁾ から、一ヵ月以上もずる休みしている告解に行くように言われたが、晩御飯が済むまで行くのを延ばしていた。父から再度催促されて、いやいやながら教会に出かけて行き、自分の罪を Schwartz 神父に告白する。主の御名をみだりに使ったこと、よそのおばあさんに意地悪なことをしたこと、自分は両親の子供じゃないと思ったこと、言い付けを守らないで、母の悪口を言ったり、人の陰口を利いたりしたこと、タバコを吸ったことなどに加えて、彼が言い辛いと思っている欲望の罪として、裏の納屋で男の子2人と女の子1人といっしょになって、汚い言葉を使ったり、下品なことを考えたり、望んだりしたことを神父に告げる。最後に神父から「嘘をついたことはないか」と質問され、「いいえ、ありません」と答えてしまい、あとで自分の罪の恐ろしさを後悔することになる。⁶⁾ しかしうっとうしい教会を出て、広々とした外に出て、さわやかな空気を深く吸いこんだ時、彼は自分を Blatchford Sarneminton という名の架空の英雄と同一視し、意気揚々と家路に着く。⁷⁾ この英雄は彼の想像力の中で自由に振舞い、彼が自分もそうなりたいと願っている理想の人物なのである。

家に帰って来ると彼は教会で嘘をついたという後悔の念が一層強くなり、明日の聖体拝領は避けなければならないと真剣に考えるようになる。⁸⁾ 明朝水をうっかり飲んだことにして、聖体拝領の資格がなくなるようにしようと思いつく。そして当日の朝早く、彼が階下の台所で水を飲もうとしていた時に、頑固で厳格なカトリック信者である父に見つかって、こっぴどく叱られ、さらにコップを流しに放り出したことで、続け様に殴られる羽目になってしまう。父から「もう一度告解をして、神のお赦しを乞うんだ」と言われて、教会のざんげ室に再び連れて行かれる。神

父は Rudolph にとって、奇妙で恐ろしく思われるたとえ話をあれこれ話しながら、突然体を崩し、膝を付き、床にへなへたと倒れてしまう。⁹⁾ その異様な姿に Rudolph は恐怖を感じて教会の外へ飛び出して行く。教会の外には若い娘たちが、男性の心をそそるように歩きながら、小麦畑で働いている若者たちに声を掛けていた光景があった。¹⁰⁾

Yellow は太陽光線やランタンの明かりと結び付き周囲に光を投げ掛け、回りの物をきらきら輝かせている。この光は化粧室の安物の石けんのおいと相俟って、空中に世俗的な雰囲気漂わせる役目を果しているようだ。

- (1) “At twilight the laughter and the voices were quieter, but several times he had walked past Romberg’s Drug Store when it was dusk and the yellow lights shone inside and the nickel taps of the soda-fountain were gleaming, and he had found the scent of cheap toilet soap desperately sweet upon the air. (159)

この状況は「大勢の人が一番いい場所に集まる時に何もかもがきらきら輝いてくるものだ」という神父の言葉と一致している。その例として神父は遊園地をあげて説明している。¹¹⁾

- (2) “Well, go and see an amusement park.” The priest waved his hand vaguely. “It’s a thing like a fair, only much more glittering. Go to one at night and stand a little way off from it in a dark place — under dark trees. ... and everything will twinkle. But it won’t remind you of anything, you see. It will all just hang out there in the night like a colored balloon — like a big yellow lantern on a pole.” (171)

そして遠くから見ている分には美しいが、近寄っていくと “the heat and the sweat and the life” (171) を感じるだけだという。この yellow に象徴される人間の営みの中の世俗的な熱気は、スウェーデン系の金髪をした娘たちによって、若い男たちに向けられる奔放な性的アピールと密接に関連している。Darkness の中にある lights を描くことによって、世俗世界に背を向けようとしながら、なおその世界に引き付けられる牧師の心の動揺を暗示しているように思える。¹²⁾

- (3) Outside the window the blue sirocco trembled over the wheat, and girls with yellow hair walked sensuously along roads that bounded the fields, calling innocent, exciting things to the young men who were working in the lines between the grain. Legs were shaped under starchless gingham, and rims of the necks of dresses were warm and damp. (171-172)

また Rudolph の父 Carl は厳格なカトリック教徒であったが、勤務先の運送会社では同僚から十分な信頼を受けることができず、人付き合いもうまくなく、さらに疑い深く落ち着きもなくて、いつもおろおろしている様子であった。¹³⁾ そのような性格が彼の髪の色 yellow ¹⁴⁾ に反映されているようだ。

- (4) On Sunday morning Carl Miller awoke in the dustless quiet of six o'clock. Kneeling by the side of the bed he bent his yellow-gray hair and the full dapple bangs of his mustache into the pillow, and prayed for several minutes. (164)

[2]

White は水滴の輝きなどにみられる白く輝くものと結び付いて用いられている。

- (5) Nothing was moved, nothing touched — except the faucet where beads of water still formed and dripped with a white flash into the sink below. (165)

また興奮と熱気を表す白熱の炎の描写に使われているのが次の一節で明らかである。

- (6) He could not tell Father Schwartz how his pulse had bumped in his wrist, how a strange, romantic excitement had possessed him when those curious things had been said. Perhaps in the houses of delinquency among the dull and hard-eyed incorrigible girls can be found those for whom has burned the whitest fire. (162-163)

さらに white が神聖さを明示する “the white Host held above the chalice” (168) の例に用いられる外に、小柄で疲れ気味の父 Carl の体の色を表すのに使用されており、神を信じ、純真な心を持つが、物事を 1 人で決断できない臆病で弱々しい性格を示唆している。¹⁵⁾

- (7) Then he drew off his night-shirt — like the rest of his generation he had never been able to endure pajamas — and clothed his thin, white, hairless body in woollen underwear. (164)

Green は “the green coast” (164) や “a low green hill” (171) のように土地の草木と結び付くと共に敷物のフェルトの色として用いられている。

- (8) The priest's nerves were strung thin and the beads of his rosary were crawling and squirming like snakes upon the green felt of his table top. He could not remember now what it was he should say. (169)

数珠は神父の持ち物であり、主と完全な神秘的合一が得られないで苦悶している神父その人を象徴していると考えてよいだろう。神父自身、人間の抱く嫉妬深さ、未熟さをまだ超越しておらず、狂気じみた行動へと駆り立てられていく様子がこの短編の最後の場面にみられるが、この green¹⁶⁾ もそういった俗世界から脱し切れていない神父の心情を暗示していると考えられよう。

Blue は Rudolph の目の色として現れている。

- (9) The beautiful little boy with eyes like blue stones, and lashes that sprayed open from them like flower-petals had finished telling his sin to Father Schwartz—and the square of sunshine in which he sat had moved forward half an hour into the room. (169)

この少年の目は美しく、幸福と希望に満ちた目のように外観上みられるが、自分の罪の意識に敏感になり、おののいている陰うつな影がその底に隠されているようだ。¹⁷⁾ この重苦しく、うっとおしい blue の色彩は、北アフリカから吹き付ける暑苦しい熱風を表す色として次のように明示的に用いられている。

- (10) Outside the window blue sirocco trembled over the wheat, and girls with yellow hair walked sensuously along roads that bounded the fields, calling innocent, exciting things to the young men who were working in the lines between the grain. (171-172)

Gray は Carl の髪の色として現れ、陰気さ、病的で絶望的な暗さを示している。

Silver は “a silver pennon” (171) や “the shine of silver spurs” (171) として使用されている。この色彩は Rudolph が神父にざんげをし、汚れなき名誉を回復した時の場面に出ており、明るくきらきら輝く物と結び付いて、Rudolph の喜びを表していると考えてよいだろう。

この短編における色彩語の頻度は次のようになっている。

yellow 5 / white 4 / green 3 / blue 2 / silver 2 / gray 1

{3}

‘The Sensible Thing’¹⁸⁾ では主人公の青年 George O’kelly¹⁹⁾ が登場する。ある早春の正午彼は今勤めている保険会社から自分の家まで駆け出すように急いでいた。New York から 700 マイル離れた Tennessee 州²⁰⁾ にいる恋人 Jonquil Cary からの手紙に気もそぞろになっており、とにかく彼女宛に電報を打とうとする。彼は「別れようなんて考えないで、すぐに結婚しよう」という内容の電報を打ち、保険会社に戻って 4 日間の休暇を求めるが、2 週間前にすでに休暇を取ったばかりなので、支配人から文句を言われ、最終的に解雇通告を受ける。George は Jonquil のもとに急ぎ、駅で彼女と会うが、彼女は George より少し若い青年 Craddock と Holt をお供にしていた。片方の青年の車で、George と Jonquil は彼女の家まで送ってもらい、やっと 2 人っきりになって話を始める。1 年以上前に George は Tennessee 州南部の建設会社に勤めていたが、もっと手取り早くもうかる仕事を探しに New York に行ったのであった。しかし予期に反してここでは週給 40 ドルの保険会社の社員にしかねれず、彼の夢はどんどん消えていった。お互いに離れて暮らしていることや、George がお金に関して自信が持てないこともあって、Jonquil の心はなかなか結婚へと向かっていかない。²¹⁾ George が彼女に近付こうとすると、かえって彼女の心は彼から離れていくのであった。²²⁾ そしてその翌日、ドライブをした後、彼は「必ず戻ってくるよ」と言って New York に向かう列車に乗り込む。

その後およそ1年の時が流れ、彼は成功して9月のある日の午後、Tennessee州の彼女のいる町に帰ってきた。さっそく電話で彼女と連絡を取って、彼女の家に出かけた。久しぶりの再会にもかかわらず、彼女の美しさは変わらず、また結婚の相手もまだ決まっていなかった。しかし2人の間にはかつての愛はすでに存在しておらず、彼は言いようのない苦悩と悲哀を感じて、ただむなしく過去を思い返すだけであった。²³⁾ つまりこの短編は彼の *romantic illusions* の損失を扱った物語と考えられる。

Yellowは病名の“*yellow fever*” (157) と共に *Jonquil* の母が会うように勧めてくれた菊作りの女性が育てていた菊の花の色として用いられている。彼女の母が2人のかつての愛が再び戻ってくるようにと配慮してくれ、また菊が咲き誇っている庭には愛の熱気が2人を包みつつあるようにみえたけれど、それ以上その愛は進展して行かない。その退嬰的な状況をこの色彩は象徴している。

- (11) The lady turned out to be nice, and the chrysanthemums were enormous and extraordinarily beautiful. The lady's gardens were full of them, white and pink and yellow, so that to be among them was a trip back into the heart of summer. (156)

Whiteが潔白、純潔、歡喜、栄光を表し、pinkが健康と希望を表すとしても、yellowの色彩によって「愛の薄らぎ」²⁴⁾ が暗示されていると考えられる。

Greenは生き生きとした活力や新鮮さを表し、*Jonquil*の衣服にこの色彩は用いられている。またgoldは*Jonquil*の美しさを高める機能を持ち、crownに似たりボンの色として用いられその効果を發揮している。

- (12) She (=Jonquil) was dressed in pale green, and a gold ribbon bound back her dark, straight hair like a crown. The familiar velvet eyes caught his as she came through the door, and a spasm of fright went through him at her beauty's power of inflicting pain. (155)

Black²⁵⁾は日焼けの色を表しているが、ここでは男性的なたくましさを示し、活動的なGeorgeの誇らしさが感じられる。

- (13) He looked at himself in the dressing-table mirror. He was almost black with tan, but it was a romantic black, and in the last week, since he had had time to think about it, it had given him considerable pleasure. (154)

この短編における色彩語の頻度は次のようになっている。

yellow 2 / pink 2 / black 2 / gold 1 / green 1 / white 1

[4]

‘The Baby Party’ に登場する主人公 John Andros は38歳で妻 Edith と 2歳半の娘 Edeといっしょに郊外の住宅地に暮らしている。12月のある日、午後4時半から近所の Markey 氏宅で催される子供パーティーに呼ばれたので、Johnも会社から帰ったら直接、Markey 氏の家に行くことになっていた。Edith が娘を連れて5時にそのパーティーに出かけると、すでにパーティーは真っ最中で、着飾った13人の幼ない子供たちが音楽に合わせて踊っているところであった。Edith は Markey 氏の妻に対して、口やかましく品もない女性だという感じがして、好感が持てなかったけれど、夫同志が通勤仲間なので親しそうなふりをしていた。にぎやかな食事も終わって、帰る人もぼつぼつ出始めた時、Ede が Markey 氏の2歳の子供 Billy が持っている熊の縫いぐるみを欲しがって、Billyから力ずくでもぎ取り、彼を床に突き倒してしまった。Billyは自分の縫いぐるみを取り戻そうとして、Ede に挑むが突き飛ばされ、むき出しの床に頭を打ち悲鳴をあげた。そばで見ていた Billy の母は怒りで真っ赤になり、Edith と口げんかになった。丁度そこへ John がやって来て、彼もこの騒動に巻き込まれて、両家の夫婦が激しく口論を始めることになってしまう。最後には夫同志が怒鳴り合い、ついに家の外に出て殴り合いの大げんかに発展していく。オーバーと帽子を脱ぎ捨て、雪の積っている歩道脇で30分ばかり取っ組み合って疲労困憊になり、ついに2人は握手してそれぞれの家に帰って行く。彼等は行き掛かり上とは言え、ささいな事で大人が真剣に殴り合いをする様子をその後お互いに思い浮かべて、自分たちの親バカぶりを実感したことであろう。しばらくして Markey 夫妻が John と Edith の家に来て来たので、John に諭されて、Edith がしぶしぶ彼等を出迎えることになる。John は階下に降りて行く前に眠っている Ede を抱き締めながら、娘への愛を確かめ、揺り椅子を動かし続ける。

この短編では pink が主たる色彩語となり、2歳半の娘 Ede の衣服や手、顔と結び付いて、かわいらしき、健康を暗示するのに使用されている。

(14) “... Ede’s going to be all dressed up in her new pink dress —” (210)

(15) They (=John and Edith) tiptoed in and bent together over the bed. Little Ede, her cheeks flushed with health, her pink hands clasped tight together, was sleeping soundly in the cool, dark room. (218)

White は幼い子供たちの額とそれを拭くためのハンカチの色として用いられ、純真さ、無邪気さを示しているようだ。また子供たちが食べる菓子の糖衣も “the white frosting” (212) としてこの色彩で修飾されている。

(16) The word “overheated” began to be used, and small white brows were dried with small white handkerchiefs. (211)

Red は Billy の髪の色として用いられ、生氣あふれる元気な子供をそれとなく示している。さらに Markey 夫人の怒った時の顔の色も red で描写されている。

- (17) Billy Markey, a stout laughing baby with red hair and legs somewhat bowed, blew out the candles, and (211-212)

BlueはEdeの目の色として使用され、彼女の幸福な様子や、希望に満たされた将来が感じられる。

- (18) He (=John) liked to take her (=Ede) on his lap and examine minutely her fragrant, downy scalp and her eyes with their irises of morning blue. (209)

この短編における色彩語の頻度は次のようになっている。

pink 7 / white 2 / red 2 / blue 1

{5}

‘The Rich Boy’ではNew Yorkの大金持の家に生まれた青年Anson Hunter²⁶⁾が主人公として登場する。物語は主人公の友人である無名の語り手「わたし」が、東部社会に暮らす上流階級の一青年であるAnsonの30歳ぐらまでの生活を、客観的に述べていくという手法を採る。²⁷⁾

Ansonは子供の頃から、両親の金や地位を背景にして、いつもグループの中心になり、Yale大学に入っても金銭からくる優越感はそのまま持続した。²⁸⁾ 1917年に大学を卒業した後で、第1次世界大戦の影響もあって、海軍航空隊に入り、Florida州のPensacolaという町に駐屯することになった。そこで彼とは全く性格の異なる保守的で控え目な金持の女の子Paula Legendreと親しくなり婚約する。彼女の方は次第に積極的になり、すぐにでも結婚したいと思うようになったが、Ansonがあるパーティーで意識がなくなるほどに酩酊し、その様子を見て彼女はお互いに性格が合わないのではないかと思ひ始める。またPaulaは彼の性格には堅実さと放縦さが同居し、二重人格だとさえ思うようになる。²⁹⁾ しかし彼の人を包み込むような活力と物分かりの良さに接すると、他の男には興奮めしてしまうのである。彼に引き付けられはするが、不安も感じるという不安定な彼女の心理状態をよそに、Ansonの方は好き放題に酒を飲んで彼女との約束もすっぽかすことが多く、婚約もついに解消されてしまう。

彼は戦後New Yorkのある証券会社に入り、彼の家柄と鋭い知性、さらにあふれるばかりの活力によって、頭角を現し、同窓仲間での評判も高くなっていった。ある時、AnsonはLowell ThayerというBoston生れの富も地位もある男性がPaulaの恋人になったという噂を聞き、彼女を失うのではないかと不安になって、Florida州にいる彼女に会いに出かける。彼女を胸に抱きながら、今までと変らない彼女の心情を確かめた彼は、これから先どうなるかわからない結婚に身を委ねる必要もないと思ひ、³⁰⁾ 彼女の結婚願望を無視してしまう。Ansonは3年間もどっぴつかずの不安定な緊張状態に置かれている彼女の気持を十分に汲み取ることができず、その夜彼女の気持が彼から永久に離れてしまったことに気が付かないまま、New Yorkに戻る。しかし2ヵ月後、前触れもなく彼女からLowellと婚約し、Bostonですぐに式を挙げるという電報を受けたAnsonはひどく落胆し、浴びるように酒を飲み、3日間というものの子供のように涙に暮れた。

時が経過し、27歳になったAnsonは仕事も順調で、彼の父が亡くなった後、母を助けながら家の切り盛りにも精を出した。彼はPaulaが結婚して1ヵ月ほどしてDolly Kargerという女性と知り合

いになる。彼女は感情を支配する知性が欠けており、当時の多くの娘たちがそうであったように、思慮も分別もなく、放らつな生活を好んでいた。彼女は Anson の性格の中に放蕩と意志の強さを見出し彼に引き付けられる。Anson の方は Dolly を愛していなかったし、彼女にも自分のその意向を伝えていた。今では Dolly との仲を清算するか、誘惑者としての責任を取らざるを得ないか、どちらかしかないことを彼も認識していた。やがて Dolly が結婚したことを仕事先の London で知った Anson は Paula の時とは違って、心から彼女の幸福を願い祝電も打つのである。

New York へ帰って会社の共同経営者になった Anson は、責任が重くなった分だけ多忙になった。彼は無軌道な生活をしていながらもかわらず、援助を求める人には手を差し伸べ、困っている人には助言や世話をいとわなかった。しかし不道德な恋愛に対してはかなり厳しい態度を Anson は維持していた。もうすぐ40歳になるという叔母 Edna が Cary Sloane という青年と浮気をしているという噂を聞いて、家名を重んじる彼はその2人と直接に会って、彼等の関係を解消するようにと説得するのである。その結果、一晚中酒を飲み続けた Cary は橋から身投げをして死んでしまうことになる。

その後、母が亡くなり家長となった Anson は Yale クラブの仲間が次々と結婚して、各自の家庭に引っ込み、自分から離れていく現実を体験し、まだ29歳にもかかわらず孤独感を味わう。³¹⁾ 威厳のある立派な青年になっていたが、今では心を許す友人もなくなっており、Paula も Dolly も過去の人になってしまったという空虚さだけが心に残っている。そんな時偶然に、一目で妊娠していると分かる Paula に出会う。彼女は前の夫と離婚した後、同じ Boston 生まれの男 Peter Hagerty と再婚していた。Anson は是非とも自分の家に来てほしいと彼女に誘われ、夕食を共にしながら思い出話に花を咲かせる。Paula には前の結婚で3人の子供がおり、今4人目が生まれることになっているが、とても幸せであることを Anson に率直に語る。いかにも幸福そうな夫婦の会話や仕草を見せつけられて、Anson もただ2人をじっとながめるだけで、Paula の質問にも何度も機械的に “Yes.” と反応するのみであった。

会社に戻った Anson は元気のなさを見抜かれ、上役から夏休みを取って外国旅行にでも行くように勧められて、気分転換のために出かけることにする。その船旅に出る丁度3日前に、出産が原因で Paula が死亡したことを彼は知らされ、憂うつな気分に取り付かれる。しかしまたまいっしょに渡航することになった「わたし」と船のバーに入りマティーニを注文し、1杯飲むと Anson の態度はがらりと変わり、数ヶ月振りの陽気さがまた戻ってくる。³²⁾ 赤いタモシャンターをかぶった娘に注意が向き、この船旅の間、Anson は彼本来の姿を取り戻し、その娘と楽しく過すのである。³³⁾ 彼は誰かが自分を愛してくれ、“responding to him like filings to a magnet, helping him to explain himself, promising him something” (207-208) の場合にのみ幸福になりうるのであった。

この短編は Fitzgerald の短編の中では最も長いものであるけれど、色彩語の数はあまり多くはない。

Red は親しく接する友人も身近にいなくなり、孤独な Anson がプラザホテルの地下室のバーから外へ出た時に目にした太陽の色彩としてまず用いられている。

- (19) He went out and walked slowly toward the blood-red sun over Columbus Circle. Suddenly he turned around and, retracing his steps to the Plaza, immured himself in a telephone-booth. (203)

友人を求めてさ迷っている彼に誰も答えてくれない状況で、彼の怒りと不安の交じり合った感情³⁴⁾が、共感覚効果 (synesthetic effect) としてこの色彩に暗示されている。怒りを伴った不安に駆りたてられて、むなしく電話を掛けまくる彼の姿がその後が続いている。残りの3例は“the red tam” (207) の表現で、Anson が気分転換の船旅に出かけた時に、船上にいた娘がかぶっていた帽子の目立つ色として現れ、気落ちしている彼の心を視覚的に引き付ける役目を果たしている。

Gray は他の色彩を隠す働きし、Dolly が着けていたピンクがかかったパウダーの色として使用されている。当時はヴィクトリア朝風のほの白い化粧がはやっていたので、彼女の艶やかな肌を隠すためにこの色彩は利用されているのである。

(20) She was dark-haired, with carmine lips and a high, lovely color, which she concealed under pinkish-gray powder all through the first year out, because high color was unfashionable — Victorian-pale was the thing to be. (188-189)

また gray は叔母 Edna の目の色としても使用され、浮気とはいえ、彼女が心底、本気になった Cary に対する愛の悲しい不毛性³⁵⁾が象徴されている。さらにこの色彩は陰気さ、絶望的な暗さも表し、Anson が自分の孤独をかみ締めている時にふと目にした、あるビルの窓ぎわにいる男も “a gray man with watery eyes” (201) として描写されている。原因は不明だが、目に涙をためて窓の下を見ているその姿を目にすると、自分がその男に投影され Anson 自身も憂うつな気分になったのである。

Green は Anson が所属していた海軍航空隊の制服の色として用いられ、生命の躍動や活気、若さを感じとれる。Anson が船旅に出かけた時の海の色としても現れ、赤いタモシャンターをかぶった娘の背景を形成しながら補色効果を生み出している。

Black は Dolly のスーツの色であり、彼女の髪の色と相俟って、Anson との不幸な愛を暗示している。同じく、この色彩は、叔母 Edna との仲を Anson によって引き裂かれ、黒々と流れる川だと思って飛び込んだ場所が石畳であり、即死してしまった Cary と結び付き死を象徴する。

(21) Cary Sloane's body was found next morning on the lower shelf of a pillar of Queensboro Bridge. In the darkness and in his excitement he had thought that it was the water flowing black beneath him, but in less than a second it made no possible difference — unless he had planned to think one last thought of Edna, and call out her name as he struggled feebly in the water. (199)

Yellow は Anson の髪の色を示し、結婚に対して臆病であり、女性の愛をうまく受け入れられない彼の性格と密接に関連している。

Blue は green と共に Anson が身に着けていた海軍航空隊の制服の色として使用され、若さの特徴である率直さ、勇気、栄光を示唆する。³⁶⁾

Pink は、Anson が Dolly と週末を過ごすために出かけていく大きなスペイン風の別荘の色を表し、Dolly の浮き浮きした希望を明示している。

Gold は Anson がいろいろと面倒を見てあげた人からお礼にもらった “gold pencils” (200) として、また silver は彼が友人の結婚の贈り物にした “silver tea-service” (201) として使用され、豪

華さ、はなやかさを示している。

この短編における色彩語の頻度は次のようになっている。作者の好む white が用いられていないことにも注意したい。

red 4 / gray 3 / green 2 / black 2 / yellow 1 / blue 1 / pink 1 / gold 1 /
silver 1

<Notes>

- 1) 小林資忠「F. Scott Fitzgerald の短編にみられる色彩表現について(Ⅱ)」(『英語英文学新潮』, NCI 論叢 1991-2, ニューカレントインターナショナル, 1992, 3月)を参照されたい。
- 2) "Absolution" is of interest not only because of its intrinsic merit as a short story but also because it was first written as a prologue to *The Great Gatsby*. James E. Miller, Jr., *F. Scott Fitzgerald: His Art and His Technique* (New York: New York University Press, 1967), p.103.
- 3) ... Fitzgerald fashioned a tale of a boy named Rudolph Miller who is ashamed of his family's low social status, and longs to be a person of quality. ... Moreover, he often takes refuge in prevarications about his having come from a much more genteel background than is actually the case, and it is these lies that he is loath to admit to his confessor. Gene D. Phillips, *Fiction, Film, and F. Scott Fitzgerald* (Chicago: Loyola University Press, 1986), pp.102-103.
- 4) ... the consciousness of its hero Rudolph Miller, a Catholic adolescent boy, is restricted at first to rather mechanical notions of purity and sin, but he gradually learns to take a more extended view of the possibilities of life. Brian Way, *F. Scott Fitzgerald and the Art of Social Fiction* (London: Edward Arnold Ltd., 1980), p.29.
- 5) Rudolph's father, on the other hand, is a harsh, unbending man, who lives solely by his narrow interpretation of the law of sin and retribution. Rose Adrienne Gallo, *F. Scott Fitzgerald* (New York: Frederick Ungar Publishing Co., 1978), p.94.
- 6) Terrorized at the thought that he has committed a sacrilege by going to communion after having lied in the confessional, Rudolph distances this act by creating a superior self, which he names Blatchford Sarnemington, whose "suave nobility" allows him to escape prosaic reality and enter the privileged world of the imagination. Richard Lehan, "The Romantic Self and the Uses of Place in the Stories of F. Scott Fitzgerald" in *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: New Approaches in Criticism* edited by Jackson R. Bryer (Madison, Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 1982), p.12.
- 7) Through Blatchford Sarnemington, Rudolph indulges his romantic fantasies, while his everyday self struggles with the problems of sexuality and mortal sin and sacrilegious communions. Rose Adrienne Gallo, *op. cit.*, pp.93-94.
- 8) The supernatural world, symbolized in the ritual of the Church, has not yet lost its terrors for him, and he is convinced that God will strike him dead at the very moment when the priest places the host in his mouth. Brian Way, *op. cit.*, p.81.
- 9) The violence done to his (=the priest's) sensibility by the antithesis of his nature and the asceticism of the life he has chosen, the terrible repression he has experienced, are evident in his mad confusion of the sacred and profane. Joan M. Allen, *Candles and Carnival Lights: The Catholic Sensibility of F. Scott Fitzgerald* (New York: New York University Press, 1978), p.96.
- 10) The story ends with a celebration of sensuality and fecundity, and the sexuality of the Swede girls which Father Schwartz had screened from his consciousness is now apparent. Joan M. Allen, *ibid.*, p.101.

- 11) In "Absolution," the lights of the amusement park suggest to the young Rudolph a fuller and more beautiful life than that imposed by his rigidly religious father. — Christiane Johnson, "Freedom, Contingency, and Ethics in 'The Adjuster'" in Jackson R. Bryer (ed.), *op. cit.*, p.239.
- 12) このような人間の2面性はこの作品を通してみられ、Irving Malin は次のように述べている。
Throughout "Absolution," Fitzgerald has been offering "alternatives" (light and dark, youth and maturity, earth and Heaven, lie and truth), suggesting thereby that daily life — as recounted here — is a *double-edged* source of uncertainty. — Irving Malin, " 'Absolution' : Absolving Lies" in Jackson R. Bryer (ed.), *op. cit.*, p.216.
- 13) Like Rudolph and Father Schwartz, he (=Carl Miller) is "mad"; he is full of "fear and trembling" ... because he cannot accept his position in the world. He is "continually dismayed." ... Carl Miller is overly alert. He is disturbed by the "shrill birds," He is so uneasy that he breathes heavily. — Irving Malin, *ibid.*, p.212.
- 14) 赤池鉄士『英語色彩の文化誌』(東京: 研究社, 1981), p.82.
- 15) 山下主一郎ほか共訳『イメージ・シンボル事典』(東京: 大修館書店, 1984), p.687.
- 16) 赤池, 前掲書, p.105.
- 17) 赤池, 前掲書, p.124.
- 18) In "The Sensible Thing," a story which Malcolm Cowley has called "autobiographical in the strict sense; it is the story of his broken and renewed engagement to Zelda Sayre," Fitzgerald returned to this theme of the fading of youthful romantic dreams for the Northern man in love with a Southern girl. — C. Hugh Holman, "Fitzgerald's Changes on the Southern Belle : The Tarleton Trilogy" in Jackson R. Bryer (ed.), *op. cit.*, p.60.
- 19) Jonquil Cary, in "The Sensible Thing," fends off the proposal of George O'Kelly until he is "ready" for her.... Until he did so (=established himself financially), she would remain "nervous" about the prospect of marriage. The ambitious O'Kelly strikes out for South America, makes his pile, and returns to claim the girl. But some of the magic has gone : "as he kissed her he knew that though he search through eternity he could never recapture those lost April hours.... There are all kinds of love in the world, but never the same love twice." — Scott Donaldson, "Money and Marriage in Fitzgerald's Stories" in Jackson R. Bryer (ed.), *op. cit.*, pp.84-85.
- 20) The South is the setting for most of the action in "The Sensible Thing." — C. Hugh Holman, *op. cit.*, p.54.
- 21) In "The Sensible Thing," the youthful hero, initially rebuffed by his sweetheart on the ground of poverty, unexpectedly makes a fortune in Peru. — Lawrence Buell, "The Significance of Fantasy in Fitzgerald's Short Fiction" in Jackson R. Bryer (ed.), *op. cit.*, p.28.
- 22) The romantic egoist is a fated man — unhappy as he desires, unhappier as he possesses. — Richard Lehan, *op. cit.*, p.13.
- 23) The problem in "The Sensible Thing" is not that Jonquil Cary has forced a change in George O'Kelly's view of her but that they must inevitably do "the sensible thing" — and that in the process of doing it, something of youth and romance and beauty is left behind. — C. Hugh Holman, *op. cit.*, p.64.
- 24) 西川好夫『新・色彩の心理』(東京: 法政大学出版局, 1972), p.152.
- 25) 赤池, 前掲書, p.210.
- 26) The atavistic associations called up by his last name hearken to primitive cultures in a manner befitting his persistence in dredging up the past. — Peter Wolfe, "Faces in a Dream : Innocence Perpetuated in 'The Rich Boy' " in Jackson R. Bryer (ed.), *op. cit.*, p.244.
- 27) これについて Gallo は次のような意見を述べており, 妥当であると考えられる。

- The only flaw in "The Rich Boy" is Fitzgerald's rather inept handling of the observer-narrator.... Since the narrator, as a character, is not essential to the development of the plot, the events of "The Rich Boy" could have been told just as effectively from the point of an uninvolved, omniscient, third-person narrator. —Rose Adrienne Gallo, *op. cit.*, p.97.
- 28) This inbred sense of superiority does not make Anson in any simple sense arrogant or snobbish : it is, rather, the basis of his cynicism and his indifference. —Brian Way, *op. cit.*, p.86.
- 29) No wonder Paula Legendre, the only woman Hunter ever loved, thinks of him as a dual personality. Wearing the stripes of the dissolute and the conservative, he alternates recklessness and control. —Peter Wolfe, *op. cit.*, p.241.
- 30) Self-distrust runs high with him, as befits a hunter whose arrows usually miss their mark. Both his love for Paula Legendre and his later elevation of her to near-legendary grandeur take root in self-distrust, perhaps even self-dislike. —Peter Wolfe, *ibid.*, p.245.
- 31) It is a portent of the future, an image of the isolation and neglect which await a man whose habits of thought and feeling no longer have any relation to the society he lives in. —Brian Way, *op. cit.*, p.87.
- 32) The nameless narrator has known Hunter for about eight years, i.e., during the time of the recorded action. That he is also with him at the end indicates that the men are well enough acquainted to sail together on an ocean cruise.... His lack of a name reflects his willingness to let life happen to him instead of imposing himself. —Peter Wolfe, *op. cit.*, p.247.
- 33) ... he begins a flirtation with the most attractive girl on the ship, and it becomes clear that the admiration of women is his one remaining resource; only by making them respond to him and love him can he sustain a little of his accustomed sense of himself. —Brian Way, *op. cit.*, p.87.
- 34) 他の例は、押谷善一郎『ステイーヴン・クレインの印象主義的技法』(大阪：大阪教育図書，1987，p.125)を参照されたい。
- 35) 赤池，前掲書，p.184.
- 36) 山下，前掲書，pp.70—71.

<References>

- 1) Akaike, Tetsushi (赤池鉄士). 『英語色彩の文化誌』 (東京：研究社，1981).
- 2) Allen, Joan M. *Candles and Carnival Lights : The Catholic Sensibility of F. Scott Fitzgerald* (New York : New York University Press, 1978).
- 3) Buell, Lawrence. "The Significance of Fantasy in Fitzgerald's Short Fiction" in Jackson R. Bryer (ed.), *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald : New Approaches in Criticism* (Madison, Wisconsin : The University of Wisconsin Press, 1982).
- 4) Donaldson, Scott. "Money and Marriage in Fitzgerald's Stories" in Jackson R. Bryer (ed.), *ibid.*
- 5) Gallo, Rose Adrienne. *F. Scott Fitzgerald* (New York : Frederick Ungar Publishing Co., 1978).
- 6) Holman, C. Hugh. "Fitzgerald's Changes on the Southern Belle : The Tarleton Trilogy" in Jackson R. Bryer (ed.), *op. cit.*
- 7) Johnson, Christiane. "Freedom, Contingency, and Ethics in "The Adjuster"" in Jackson R. Bryer (ed.), *ibid.*
- 8) Kobayashi, Yoshitada (小林資忠). 「F. Scott Fitzgerald の短編にみられる色彩表現について (II)」(『英語英文学新潮』, NCI 論叢 1991-2, ニューカレントインターナショナル, 1992, 3月).

F. Scott Fitzgeraldの短編にみられる色彩表現について (Ⅲ)

- 9) Lehan, Richard. "The Romantic Self and the Uses of Place in the Stories of F. Scott Fitzgerald" in Jackson R. Bryer (ed.), *op. cit.*
- 10) Malin, Irving. " 'Absolution' : Absolving Lies" in Jackson R. Bryer (ed.), *ibid.*
- 11) Miller, James E., Jr. *F. Scott Fitzgerald : His Art and His Technique* (New York : New York University Press, 1967).
- 12) Nishikawa, Yoshio (西川好夫). 『新・色彩の心理』 (東京:法政大学出版局, 1972).
- 13) Oshitani, Zenichiro (押谷善一郎). 『ステイプン・クレインの印象主義的技法』 (大阪:大阪教育図書, 1987).
- 14) Phillips, Gene D. *Fiction, Film, and F. Scott Fitzgerald* (Chicago : Loyola University Press, 1986).
- 15) Way, Brian. *F. Scott Fitzgerald and the Art of Social Fiction* (London : Edward Arnold Ltd., 1980).
- 16) Wolfe, Peter. "Faces in a Dream : Innocence Perpetuated in 'The Rich Boy' " in Jackson R. Bryer (ed.), *op. cit.*
- 17) Yamashita, Kazuichiro (山下圭一郎) et al. (trans.). 『イメージ・シンボル事典』 (東京:大修館書店 1984).

(1991年10月11日 受理)